

令和4年度第4回地方独立行政法人京都市立病院機構理事会 議事録（要旨）

- 日 時： 令和4年8月30日（火） 午前10時30分から11時30分まで
- 場 所： 市立病院北館7階ホール1
- 出席者： 理事長 黒田 啓史
理 事 清水 恒広、岡野 創造、半場 江利子、松本 重雄、位高 光司、
能見 伸八郎、山本 みどり、白須 正
監 事 長谷川 佐喜男 中島 俊則
事務局 折戸経営企画局次長、大島京北病院事務管理者・統括事務長、菱田経営企画課長

1 開会

2 報告事項

(1) 地方独立行政法人京都市立病院機構評価委員会結果報告について（報告事項）

資料1に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 評価委員会で当院の努力が高く評価されたことは喜ばしい。一方、コロナ対応に係る補助金制度がなくなることを見据えて、経営改善に引き続き取り組む必要がある。
→ 10月以降の国の方針開示に備えながら、病床稼働の更なる効率化や入院の診療単価維持に努め、職員の共通認識としたい。
- 「PFIの活用」について、B評価が2つあるが、課題は何か。
→ 部門によっては、委託企業と現場との調整に課題が残っている。協力企業に対して業務内容の指導が不十分なきがある。
- 院内のコロナ対応について、危機管理体制は設けているか。
→ 毎週感染管理センターが中心となってコロナに関する検討部会を開催し、課題を整理し、本部会議で病院としての方針を決定している。院内の感染事案が発生した際にも、臨時会議において速やかに病院方針を決定し、院内に周知する体制を整えている。

(2) 月次収支報告（6月まで）（報告事項）

資料2に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 入院患者数が昨年度と比較して減少している原因は。
→ 昨年度の同時期と比較して、コロナ対応に係る病床確保のため、一般病床の数を100床ほど減らしている。一方、効率的な病床稼働に病院一丸となって取り組んだことで、診療報酬単価の増加につながったと考えている。ポストコロナにおいては、病床数が元に戻った際に、いかに入院患者を獲得できるかが課題と考えている。
- 京北病院について、今年度も黒字が期待できるか。
→ 昨年度に引き続き、住民向けのワクチン接種を月700～800件実施しており、それに伴う収入は見込んでいる。しかし、今年度の決算についての見通しは付いていない。
- 昨年度と比較して4～6月はコロナの感染者が少なかったが、第7波を受けて、稼働はどうか。
→ 7月については、特に後半、第7波によるコロナ患者数が増加したが、一般患者数も増加したため、前年度比で稼働は好調に推移した。8月は一部入院制限を行ったことにより、稼働状況としては低下し、収支にもかなり影響が出ると予測している。

3 閉会